

# 演出ノート

## 田口 道子

アレクサンドル・デュマ・フיסの原作『椿の花の貴婦人』をパリの劇場で観劇したヴェルディがオペラ化した『ラ・トラヴィアータ』はオペラ史上今日でも最も上演回数の多い作品です。日本でもタイトルが『椿姫』と訳されて、人気が高く、第一幕の『乾杯の歌』は誰もが耳にしたことがあるほど頻繁に演奏されています。

今年のホール・オペラ®はこの作品に挑戦します。

タイトルは『椿姫』ではなく『ラ・トラヴィアータ』にしたいというプロデューサーの考えに即座に同意した私は、この作品をヴェルディの『ラ・トラヴィアータ』として捉えることをコンセプトとして作品に取り組みました。

ヴェルディの音楽を繰り返し聴き、台本を深く読めば読むほど真実の愛を知らなかつた「道を外した女性」の悲劇が見えてきました。高級娼婦として華麗なる社交界で贅を尽くした生活を送っていたヴィオレッタですが、彼女は肺の病に侵されていて常に死への恐れを抱いています。愛のない寂しさや死への恐怖から逃れるために彼女は夜会でお酒に浸る毎日を過ごしていたのです。ヴェルディは第一幕のプレリュードと第三幕に導入する間奏曲を調性は違うものの同じ旋律にしています。そこから与えられたヒントは、死の床にいるヴィオレッタが自分の人生を回想しているのではないかということでした。サントリーホールはコンサートホールですから舞台は仮設ですし、舞台装置もない中での上演です。そこで私は映像を使ってヴィオレッタの心理を表すことにしました。

第一幕の映像には華やかな生活を表す鏡、儂さを表すろうそく、病に侵されたヴィオレッタの残された時間を表す時計が拡大されて現実離れした形で象徴的に描かれています。人を愛することも愛されることも拒絶して生きてきたヴィオレッタの前に、彼女に愛を捧げる青年アルフレードが現れた時から蔓草の絡み這う画像が重なってきます。このアラベスク調の画像によって二人の間に立ちはだかる目に見えない壁、決して結ばれることのない二人の運命を表現できればと思います。

第二幕第1場では華麗な社交界を退き、パリの郊外に暮らすヴィオレッタと愛に満ちた生活に満足するアルフレードに不幸が影を落とします。この場面の映像は窓の外の林が霧に覆われていることで先の見えない、明るい将来がない二人の運命を表します。アルフレードの父ジェルモンの登場によって苦しい別れが決定的になるのです。道を外した女性と暮らす兄弟がいっては娘が結婚できないと訴える父親の言葉に、ヴィオレッタは自分が犠牲になることを約束し、社交界に戻る決心をするのです。

第二幕第2場はフローラの館での仮面舞踏会の場面です。ここでは地獄を想像していただきたいと思います。幸福の絶頂から真っ逆さまに落ちていくヴィオレッタとアルフレード。登場人物は全員階段を降りて入場することで、あたかも奈落の饗宴に参加するかのような雰囲気が作れればと思います。

第三幕は死の床でアルフレードとの再会という最後の望みを待ち焦がれるヴィオレッタを一筋の明かりで表現するつもりです。絶望の縁で過ぎ去った日を顧み、道を外した女性は誰からも許しを得られないですかと神に祈るヴィオレッタのもとに、真実を知ったアルフレードが駆け付けます。やっと幸せをつかんだヴィオレッタですが、愛するアルフレードの腕の中で死んでいきます。

ヴェルディはアレクサンドル・デュマ・フיסが自身の経験をもとに著した小説『椿の花の貴婦人』を戯曲化した作品を、パリの劇場で、後に結婚相手となるジュゼッピーナ・ストレッポーニと観劇しました。オペラのための台本をフランチェスコ・マリア・ピアーヴェに依頼し、一年足らずで作品を完成させています。それまで歴史上の英雄を描くことが多かったヴェルディですが、『ラ・トラヴィアータ』で初めて同時代の社会を題材とした作品を書きました。結婚していない関係のストレッポーニと同棲していることに対する人々の誹謗中傷や若くして亡くなった妻の父親の態度など、ヴェルディが自分の人生と重ねて、当時の社会を告発した作品でもあります。この題材は上演禁止法に触れたため、初演では、100年ほど時代を前に移した設定で上演されました。

さて、本原稿を執筆している2021年9月上旬現在、コロナ禍は衰えを見せず未だに感染者が後を絶たない状態です。この状況の中でオペラを上演するためには大変な困難を乗り越えなければなりません。初めに「挑戦します」と申しましたが、制作にかかる方々、舞台スタッフや出演者の皆様が完全に一つとなって、まさに戦いに挑む心構えで稽古に励んでいます。舞台上での歌手たちの距離をとらなくてはならず、合唱の人数も大幅に減らさざるをえません。舞台上での動きも制限されています。それでも私たちは観客の皆様に感動をお届けしたいという気持ちで一心に戦って参ります。

決して音楽を邪魔することなく観客の皆様が音楽に集中できる舞台を作ることを目指して、最後まで諦めずにできる限りを尽くして公演に臨みたいと思います。

(たぐち みちこ・演出家)